前森に蛇屋敷または弥蔵やしきと称し昔から人の住まない空屋敷がある。

いつの頃かその屋敷の家に弥蔵という者がいて、山谷の滝の沢へ木樵に行くと山苺の実が沢山なっていた。これ幸いとかぶっていた笠一杯もいで帰ろうとすると、一杯採った筈の苺が一粒もない、不思議に思ってあたりを見廻せば傍に一匹の小蛇が眼を光らしている。

てっきり此奴の仕業と、憎さも憎しと、腰の山鉈でいきなり蛇の頭に一撃を喰わした。すると俄かに一天かき曇り、雷電はためき、山が鳴り動き天地が真暗になる程の大雨が降ってき、忽ち二丈ばかりの大蛇に姿をかえ、頭の傷から泉の如く鮮血を噴き出し物凄い形相で、眼を輝かし、焔の如き口を開いて弥蔵目がけて飛びかかってきたので、気絶せんばかりに驚いた弥蔵は命限りに逃げ家に帰ったが、それきり熱病にとりつかれ、『蛇が、蛇が』と狂い廻った。驚いた家族はさっぱりわけが判らないまま、兎に角まず医者を呼び次に祈禱とあらゆる手段を尽した。永い間かかって熱も下りやっと命だけは取止めたが、体がなかなか元のようにならない。勧める人もあって小安温泉に行けば、自分より先きに六尺豊かな大坊主が一人湯治していた。坊主は頭に鉢巻をしていたので、弥蔵がたずねると、坊主は、自分は湯沢辺の者だが、実は先頃少しいたずらしたので乱暴者のため頭に傷つけられたと語った。よく見るとこの坊主、どこかで見たような、凄味があって只者でないことに気がついた。ビックリした弥蔵は恐ろしさにふるえて、そこそこに風呂から上がり、坊主に見られないように勘定を済ませ、大急ぎで逃げ出した。家に帰った弥蔵は再び煩い、『蛇が蛇が』と口走り到頭死んでしまった。その後次ぎ次ぎに一家悉く死に絶え、ついに跡がなくなったという物語である。

その後弥蔵屋敷に家を建てる者もあったが、何回建直しても、屋根にも柱にも蛇の鱗の如き形が現われるので誰も住む者がなくなったという。

弥蔵の死後滝の沢に茸採りに行ったら二丈余りの大蛇の死骸があったという。